

2024年7月1日

各位

公益財団法人古泉財団事務局

2023年度助成対象者（社会科学系）成果報告書の公表について

2023年度古泉財団研究費助成金助成対象者の研究成果について、成果報告書を公表いたします。

成果報告書は、助成対象者から提出されたものを加筆修正することなく掲載しております。

研究成果について、ご関心のある方は、研究者が在籍する各大学・研究機関様へご連絡ください。

2023 年度古泉財団研究費助成金成果報告書

(敬称略)

氏名	所属	研究題目
原口 彩子	新潟医療福祉大学 社会福祉学部 准教授	精神障がい者による「食農福教育 連携農園」経営の可能性
荒川 大靖	新潟医療福祉大学 社会福祉学部 助教	児童館における「食」をテーマにし た児童健全育成活動の実態に関す る研究
板垣 順平	長岡造形大学 大学院造形研究科 准教授	小規模な地域交流の場における共 食と食や農のストーリーテリング をきっかけとした地域愛着の醸成 とその形成過程のプロセス化を試 みる検証研究
石川 陽希	新潟医療福祉大学 大学院医療福祉学研究科 健康科学専攻	潜在連合テスト (IAT) による視覚・ 味覚のクロスモーダル現象の検討 ～器の形と味覚の関係～

2024年 5月 17日

公益財団法人古泉財団
代表理事 古泉 肇 殿

助成対象者

大学・研究機関名 新潟医療福祉大学
役職名・研究科/学年 准教授・社会福祉学科
氏 名 原口彩子



貴財団より助成を受けた研究について、得られた成果を次のとおり報告いたします。

1. 研究課題

精神障害者による「食農福教育連携農園」経営の可能性

2. 研究成果

・原口ゼミ新農園「うみはた」の立ち上げ

2023年4月、新潟市西区より、北区島見町（当大学近く）に実験農園「うみはた」（砂地の遊休農地約2反を借り受ける）を移した。近隣から使わなくなった簡易ビニールハウスを譲り受け、地域の業者さんの協力で学生がハウスを移転した（写真1）。貴法人の助成金を活用し、ハウスに防虫ネット、遮光布を取り付け、苗栽培が可能となった。

井戸掘削に100万円ほどの見積もりが上がってきたため、資金集めに苦慮し、出来上がるまでは、学生がシフトを組んで近隣の公園よりタンクで水を運び、春植えの枝豆やケールを懸命に守ろうとしたが、夏の猛暑に勝てず、8割がた枯れてしまった。9月、貴法人の助成金の一部を充当し井戸を掘削、これにより、秋植えの野菜種の植付けが大規模にできるようになった（写真2）。

・2023年度食農福教育プログラムの実施

近隣の自立訓練施設いなほ園の利用者、新潟市内のフリースクールロビオキの児童生徒、本学の学生、総勢60名で食農福教育プログラムによる共生イベント（7/27）を実施した（写真3）。助成金の一部をピザ窯用のレンガ購入に充て、多様な人々が力を合わせて窯を手作りし、後にみんなで料理して最高の薪窯ピザを試食した（写真4・5）。春植えのじゃがいもを掘り、ピザ窯を一から手作りし、車座になって語り合い、ともに調理し笑いあって食す、この一連の営みが共生社会の縮図であり、体験した人々の精神に深く刻み込まれる共生体験となると確信した。

・食農福教育連携農園経営の可能性

2023年度は、フリースクールの児童生徒10名程度、教員1名と大学近接の障害者自立訓練施設の利用者とともに協働する中で農業に関心を持ち、持続的に農作業に関わる人材を探したが、見つからなかった。農園を持ちたいという意欲を有する人を探すには、今後行政（保健所）と連携し、サービスにつながっていないひきこもりの方も視野に入れていく必要があると考える。そのためには広く地域住民に開かれた食農福教育イベントにも力を入れ、風通しのいい、誰にとっても居心地のいい“集い畑”を実践していく必要がある。



左上/写真1 左下/写真2

上/写真3 右上/写真4 右下/写真5

2023 年度古泉財団研究費助成金成果報告書

2024 年 5 月 17 日

公益財団法人古泉財団

代表理事 古泉 肇 殿

助成対象者

大学・研究機関名 新潟医療福祉大学社会福祉学科

役職名・研究科/学年 助教

氏 名 荒川大靖



貴財団より助成を受けた研究について、得られた成果を次のとおり報告いたします。

1. 研究課題
児童館における「食」をテーマにした児童健全育成活動の実態に関する研究
2. 研究成果
<p>本研究は、新潟県内の児童館における企画や行事のうち、「食」をテーマとした活動の実態を把握するとともにその効果について検討することを目的として実施した。当初の計画における研究方法は、量的調査の手法を用いて新潟県内の児童館全 76 館のうち、新潟県児童館連絡協議会加盟している児童館に対する質問紙調査を予定していた。その後、共同研究者と具体的研究手法について検討する中で、調理設備や屋外の畑の有無など児童館の施設設備が多様である点や児童館周辺の地域及び教育機関との関係が児童館の取り組みに大きな影響がある点などが指摘された。そこで、実施回数などを量的に調査することに比べ、質的な側面から深めることにより高い効果が期待できるのではないかと結論に至った。ついては、縁故法により調査対象として選定した新潟市内児童館 3 箇所の館長に対して、半構造化面接法によるインタビュー調査を実施することとした。併せて、調査者が児童館においてプレワークを提供し、その中で児童が食事や水分摂取についてどのように過ごしているかという点で参与観察を行った。</p> <p>インタビュー調査結果からは、次の 3 点が考察された。①児童館内で安全に食事・おやつ等食行動を取り扱うためには、自由来館という特性を活かしながら、個別に児童の健康上の情報を保護者と共有するなどして、アレルギー反応などのリスク管理を事前に行う必要がある。③児童館内で食事・おやつを認めるためには、指定管理の委託元の行政機関との間で、来館児童の安全管理という観点において検討が必要であるが、ハードルは高い傾向がある。②一方で、来館児童の持参した食事やおやつの中身や量を児童厚生員が把握することで、食をとおした家庭生活における課題などを予測し、保護者への予防的関与のきっかけとすることができる。③児童館事業の一環として、児童館敷地内や近隣の農地における畑作業に対して、児童厚生員と児童および地域住民が協働して取り組み、収穫作物を家庭に持ち帰ることで、親子で食に関する関心を深めることができる。④収穫した野菜の譲渡・寄付などをきっかけとして児童館が隣接する子ども食堂などとの関係を深め、地域における児童健全育成のネットワークが広がる。</p> <p>児童館における参与観察をとおして、食に関して子どもの意見を積極的に聞き児童館運営に活かすことの取り組みが不足していることが明らかとなった。児童館をよく利用する児童ほど「児童館は前からこの(食べちゃいけない)ルールだから」などの声が聞かれた。一方で、長期休みなどの際は児童館外の公園や近隣の保健センターなどで、おやつを食べる様子も確認されていることから、児童の主体性を尊重することも基本法の理念から考えて、児童館における食事やおやつの取り扱いについてこどもの声をきき、児童館運営に活かす可能性を持っていると考える。</p>

公益財団法人古泉財団研究費助成金 研究成果報告書

2024年 5月 30日

公益財団法人古泉財団

代表理事 古泉 肇 殿

所属機関名 長岡造形大学

氏名 板垣 順平



貴財団より助成を受けた研究について、得られた成果と助成金の収支について、次のとおり報告いたします。

研究課題

小規模な地域交流の場における共食と食や農のストーリーテリングをきっかけとした地域愛着の醸成とその形成過程のプロセス化を試みる検証研究

研究成果（学会報告等があれば、著者名、掲載誌または会議名、題目、年月日などもご記入ください。）

本研究では、①食や農のストーリーテリングによる地域愛着の醸成、②地域の特産振興と特産品の魅力発信、の二つを射程としたパイロットプロジェクトを長岡市内において、コミュニティカフェとして2023年4月から2024年3月までのあいだに20回実施してきた。このパイロットプロジェクトでは、地域愛着の希薄化が危惧される20～30代の若者を対象として、地元の農産物や加工品などの特産品を利用した軽食や、それら特産品にかかる魅力や生産者の想いをストーリーとしてまとめたものを参加者同士の対話の話題として提供した。このコミュニティカフェに参加した参加者のなかから、「初参加時以降もこの場に再来した者」と「初参加時以降この場に再来しなかった者」に分類し、前者のうち、①初参加時以前に筆者との面識がなかった、②名前と顔は一致していたが筆者とその人が直接話したことがなかった（知り合いの知り合い程度の面識）のいずれかの条件を満たした8名を分析対象者として選出した。そして、彼らの参加開始時から終了時までの具体的な対話内容や参加者同士の対話の様子などに関するモニタリング調査を実施した。その後、参加者らの口述情報を文字テキストデータとして抽出し、テキスト含意官能評価システムを用いて地域愛着や地域の特産品の魅力などにかかるテキストデータを帰納的にコード化するとともに、コード化したデータの網羅率をカバレッジ分析によって算出した。その結果、初参加時以降もこの小規模な対話の場に再来した者は、初参加時に筆者や他の参加者との関係が十分に構築できているとは限らない段階において、長岡の特産品を使用した軽食を食べながら、食や農にかかるストーリーにかかる雑談を主調としながらも婉曲的に愚痴や悩み相談が展開されるきっかけとなったことで「ネガティブな内容」と「ポジティブな内容」が入り混じり、対話の返報性が促されたことが伺えた。これらが参加者にとって心理的に安全であることが示されたほか、ことに同時に食材の話題をきっかけに地域に対する興味関心の向上につながったことが示唆された。これらが、その後の継続的な参加への動機づけになり得ることや地域愛着の要因の一つとなり得ることがわかった。これらの過程を反映させたものが図1である。この「自己開示」が行われることで、その後の「周辺の役割行動をとる」フェーズや「主体的活動を始める」フェーズなど、参加者の行動変化にも寄与するとともに、その行動変化を後押しするためのきっかけとして、共食と食や農のストーリーテリングが有効であることが本研究で明らかになった。

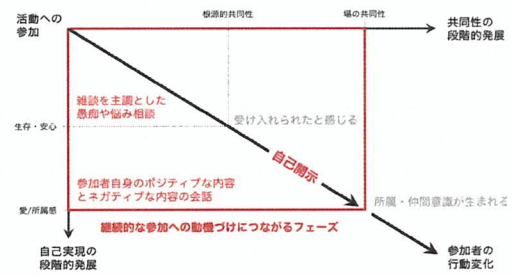


図1 小規模な対話の場への参加による自己開示と行動変化の過程（坂倉 2015 より一部抜粋、赤字部分を筆者が加筆して作図）

研究実績

佐々木茉歩, 板垣順平: インフォーマルコミュニケーションを主軸とした小規模な「場」の効果の検証, 日本デザイン学会研究発表大会, 口頭発表, 2023年6月23日, 芝浦工業大学

佐々木茉歩, 板垣順平: インフォーマルコミュニケーションを主軸とした小規模な対話の場の効果の検証-新潟県長岡市で実施した小規模な対話の場に参加した参加者の口述情報の分析から, 日本デザイン学会, デザイン学研究, 査読付き論文, 掲載日未定

2023年度古泉財団研究費助成金成果報告書

2024年 5月 15日

公益財団法人古泉財団

代表理事 古泉 肇 殿

助成対象者

大学・研究機関名 新潟医療福祉大学大学院

役職名・研究科/学年 医療福祉学研究科 健康科学専攻 健康栄養学分野

氏名 石川 陽希



貴財団より助成を受けた研究について、得られた成果を次のとおり報告いたします。

1. 研究課題
潜在連合テスト (IAT) による視覚・味覚のクロスモーダル現象の検討～器の形と味覚の関係～
2. 研究成果
<p>1. はじめに</p> <p>ヒトの味覚は、嗅覚、体性感覚、聴覚、視覚、三叉神経からの情報が統合され、「味」として知覚される。近年、クロスモーダル現象と呼ばれる五感の相互作用が味に与える影響が報告されている。聴覚一味覚、触覚一味覚などのクロスモーダル現象が報告されるなか、丸みを帯びている物は甘味を強く感じ、角ばっている物は酸味を強く感じる、という視覚一味覚の報告が存在する。クロスモーダル現象で用いられる指標は、リッカートスケールや VAS 法などの顕在的態度が一般的である。一方で、無意識的かつ直感的な回答を指す潜在的態度も存在し、画像と単語の関連付けをキーボードのキーを押す反応速度で計測する IAT という手法が用いられる。また、クロスモーダル現象と支払い意欲に関する報告もあり、回答者にとって物の価値に対して支払ってもよいと思う最大価格を WTP と呼ぶ。</p> <p>クロスモーダル現象の検討に潜在的態度を指標とした報告が少ないため、丸と四角のパッケージと甘味・酸味の関連付けを IAT で検討した。また、VAS 法を用いた顕在的態度と潜在的態度の間に相関関係があるか、パッケージ形状の違いによって支払い意志が変化するかを調査した。</p>
<p>2. 方法</p> <p>対象は、カバーストーリーで集められた、N大学の健康栄養学科1-4年生女子27名とした。実験条件はパッケージの形状(四角と丸)の2条件と単語(甘いと酸っぱい)の2条件で行った。潜在的態度は、IATを用いて、パッケージと対応する単語の反応速度を測定した(dスコア)。実験の制御及びデータ収集は Millisecond Software 社の Inquisit 6を用いた。dスコアは使用するソフトウェア内で集計・計算され、-2から+2の値で算出された。顕在的態度は100mmのVAS法を用いて、被験者が感じた尺度で甘味と酸味、好ましさ、また食べたいかと思うかを回答させた。また Willingness To Pay (WTP: この商品にいくらまで支払えるか)を回答させた。IATについて、dスコアとVAS(パッケージの形状2条件×味覚2条件=4条件)を用いてスピアマンの相関係数を求めた。また、先行研究の丸い物は甘味を強く感じ、角ばった物は酸味を強く感じるという報告に沿って本研究を行っているため、顕在的評価で得られたデータ(VAS、WTP)を用い、丸パッケージと角パッケージで対応のあるt検定を行った。有意水準は5%とした。</p>
<p>3. 結果と考察</p> <p>顕在的態度でクロスモーダル現象は確認されず、dスコアとの相関関係が認められなかった。また、丸パッケージと四角パッケージでWTPの有意な差は認められなかった。潜在的態度の評価では、被験者が共通して丸=甘味、四角=酸味という直感的な関連付けをしていることが明らかになった。</p> <p>潜在的態度における形状と味覚の結びつきがある他方で、顕在的態度ではクロスモーダル現象が現れなかった理由として、食事とIATにおける刺激される感覚の違いやパッケージの形状の認識の齟齬が考えられる。この違いが潜在的態度と顕在的態度の乖離につながったと考察されるが、他の分野では潜在的態度と顕在的態度が相関し、互いに影響し合っていることも指摘されている。また、潜在的態度とクロスモーダル現象は衝動買いに深く関係している。本研究結果のWTPとメーカー希望価格は近い値をとり、これは価格バイアスを受けず、適正価格で試料の評価が行われたことを示唆しており、丸パッケージが甘味、四角パッケージが酸味を無意識的に期待することで、販売促進に寄与できる可能性がある。</p>